

歳時詩と歳時記——六朝期九月九日詩の二つの傾向から

佐野 誠子

はじめに

中國古典詩には季節を題材とするものが多い。また、季節の變化に伴う歳時儀禮・行事を題材とする詩も多數あり、宋代にはすでに蒲積中が歳時儀禮・行事を詠った詩を集めた『歳時雜詠』を編み、現在日本でも『漢詩歳時記』といった類の書が複數出版されている。本論文では、このような歳時儀禮・行事を詠った詩をとりあえず「歳時詩」と呼びたい。

この歳時詩、あまりにもありふれているために、いつの時代にも盛んにつくられたように思われるかもしれない。しかし、現存する作品を調査すると、時代による作例、また對象とする歳時による出現時期には、著しいかたよりがある。このことについて、個別の歳時行事についてはすでに指摘があるが、全體的な問題については注意が向けられてこなかった。そこで、筆者は六朝期の歳時詩について、歳時別に作例數を數えてみた。すると、歳時詩の作例には、かなりかたよりがある状態となつてゐることがわかつた。

また、この種の歳時詩は、唐代以降にはどの歳時に關しても大量に作られ、ありふれた存在となつてゐる。だからこそ、我々も、中國詩は歳時儀禮・行事を詠むことが普遍的に行われてきたとの先入觀をいだきがちなのである。

なぜ六朝期には、このような歳時毎に歳時詩の作例數に差があるのだろうか。また、唐代以降にはありふれた題材となつたことには、どのような背景があるのだろうか。

いっぽう、我々が歳時詩を読むとき、歳時儀禮・行事が過去にどのように行われていたのかについて、各種の古歳時記や類書中の歳時の項目に引用された記事を參考にする。とりわけ、中國の歳時記の祖である『荆楚歳時記』は必ず參照される書といつてよいだろう。この『荆楚歳時記』

は、梁代、宗懷が著した。また、後述するように、歳時詩は齊・梁代から作例が増加しはじめている。つまり、歳時詩も歳時記もほぼ同じ時期にジャンルを確立したと考えられないだろうか。この歳時詩の題材の拡大と『荆楚歳時記』をはじめとする、歳時記の編纂、また類書の編纂との間には何か関連があるのだろうか。

歳時記に關しても、基礎的な研究はあり、なぜ編まれたのかについての考察はある。しかし、歳時詩との關係については説かれていない。

筆者の關心は、梁代以降、なぜ歳時記が編まれはじめたのか、また歳時詩の題材の拡大が起きたのかという點にある。今回は、重陽の節句で有名な九月九日を題材とした詩を素材に、その意味を考えてみたい。

一、六朝期九月九日詩の二つの傾向

前述のように、歳時詩には、作例數のかたよりのみならず、歳時毎にその詠まれた状況や内容の違いがある。

中國の儀禮・行事を行う日付は、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日と陽數（奇數）が並んだ日が多い。現在の我々からすれば、これらの日付の儀禮・行事が同等の待遇を受けていたかのような印象をもちかねないが、作例數もその内容も歳時毎に大きく違う。筆者が『歳時雜詠』及び『先秦漢魏晉南北朝詩』^③により、當該日の儀禮・行事を題材としている六朝期の詩の數を數えたところ、三月三日（上巳）^④四十一首、五月五日二首、七月七日三十四首、九月九日二十七首となった。

このうち、極端に作例が少ない五月五日も、古くから行事としての記録は存在し、六朝當時、五月五日端午節という祭日が存在しなかったために（たとえば元宵節であれば唐代以降に行われるようになった行事であり、作例が存在しなくても何らおかしくない）、詩に取りあげられなかったというわけではない。そうではない場合に、各日付の詩の作例に大きな差があるのはどうしてなのだろうか。

三月三日の詩は、王羲之の蘭亭で行われた曲水の宴で詩の競作が行われたように、六朝全期間を通して、主として當日皇帝主宰の宴が行われ、その場で競作された應制詩が大半である。かたや、七月七日の詩は古詩十九首其十「迢迢牽牛星」で詠われたのを契機に、六朝期には、當日の宴席で詠まれたとおぼしき詩作例もあるものの（晉・潘尼「七月七日侍皇太子宴玄圃園詩」等）、牽牛織女や當日行われる穿針の風習を題材とした詠物詩がほぼ全てである。

そして、九月九日、重陽節の詩はどのようなものであろうか。まず、重陽節の風習の内容から確認したい。

『荆楚歲時記』の九月九日の記事は「野游登高、佩茱飲菊」と題し、

九月九日、四民並籍野飲宴。

九月九日には、士農工商の四民⁽⁷⁾が野外に出かけ宴會をする。

とある。また隋の杜公瞻の注では、

九月九日宴會、未知起於何代。然自漢世以來未改。今北人亦重此節、佩茱萸、食餌、飲菊花酒。云令人長壽。近代皆宴設于臺榭。

九月九日に宴會をすることは、いつから起こったのかわからない。しかし、漢代以來變わっていない。今、北方の人もこの節句を重んじ、吳茱萸（カワハジカミ）の實を身につけ、餅米の團子を食べ、菊の花を浮かべた酒を飲む。これらは長壽をもたらすという。近頃ではあずまやがある高臺の上で宴會をする。

とする。

三月三日曲水宴と七月七日七夕の詩の作例がほぼ一定の傾向を示すなか、九月九日の詩は異なる二つの詩風を有する。文末に筆者が調査した隋以前の九月九日に關係する詩の一覽表を附す。

表一は詩題あるいは詩中の語句で、（九月）九日や重九といった語が用いられている詩の一覽である。また表二には、九月九日とは明記されないものの、『荆楚歲時記』にみられるような、菊や飲酒など、重陽節の行事を想起させる題材が詠み込まれている詩を整理した。

表一からは、九月九日詩に二つの傾向があることが読み取れる。

ひとつは、陶淵明のような菊酒の詩である。表一1番陶淵明の「九日閒居」詩は重陽の節句の菊酒を題材とし、序でつぎのように述べる。

余閒居愛重九之名。秋菊盈園、而持醪靡由。空服九華、寄懷於言。

私は隱居暮らしをしていて、重九の日を好んでいる。秋の菊が庭いっぱい咲いているのに、それを入れて飲むべきにこり酒がない。ただ菊花を服用して、その思いを詩に託した。

そして詩はつぎのようなものである。

世短意恆多、

斯人樂久生。

日月依辰至、

世は短く意は恆に多く、

斯に人 久しき生を樂（ねが）ふ。

日月 辰に依りて至り、

舉俗愛其名。

俗を舉げて其の名を愛す。

露淒暄風息、

露淒まじく 暄風息み、

氣澈天象明。

氣澈み 天象明るし。

往燕無遺影、

往く燕 遺影無く、

來雁有餘聲。

來る雁 餘聲有り。

酒能祛百慮、

酒は能く百慮を祛（はら）ひ、

菊解制頽齡。

菊は解きて頽齡を制す。

如何蓬廬士、

如何ぞ蓬廬の士、

空視時運傾。

空しく時運の傾くを視ん。

塵爵恥虛疊、

塵爵 虚疊を恥ぢ、

寒華徒自榮。

寒華 徒に自ら榮（さ）く。

歛襟獨聞謠、

襟を歛（をさ）めて 獨り聞かに謠へば、

緬焉起深情。

緬焉として深情起くる。

棲遲固多娛、

棲遲 固より娛（たのし）み多く、

淹留豈無成。

淹留するも豈に成ること無からんや。

また、陶淵明は、表二二番「飲酒二十首」其の七についても「九日」の語はないものの、菊や酒など、重陽の行事を想起させる語を用いている。その他、重陽の節句なのに酒がなかった陶淵明に王弘が酒を贈るという話が宋・檀道鸞『續晉陽秋』にある（『藝文類聚』卷四・歲時中・九月九日所引）。

陶潛嘗九月九日無酒、宅邊菊叢中、摘菊盈把、坐其側久。望見白衣至。乃王弘送酒也。即便就酌、醉而後歸。

陶淵明はかつて九月九日に酒がなく、家の近くの菊のくさむらで、菊を摘んで、くさむら近くに長いこと座っていた。遠くを眺めていると、白服を着た使者があらわれた。王弘が酒を贈ってくれたのだ。そこで、酒を飲み、酔っぱらうと歸った。

このように、陶淵明と菊と酒、そして重陽節は切っても切れない関係にある。

九月九日重陽節の詩といえ、陶淵明の詩の印象が強く、また後述するように、唐代以降には、陶淵明の詩を意識した九月九日の詩が多く存在するが、六朝期においては、そのような詩は多くはない。長谷川滋成『陶淵明の精神生活』等がすでに指摘するように、陶淵明以降、六朝期に九月九日を詠った作例のほとんどは、謝瞻、謝靈運の「従宋公戲馬臺集送孔令詩」を模範とした公宴詩である。これがもうひとつの九月九日詩である。

そして、九月九日の公宴詩は、陶淵明の詩とは趣がだいぶことなる。つぎに、九月九日の宴詩についてみていきたい。

二、九月九日の宴詩とそれに詠み込まれるもの

表一には、詩が宴席で詠まれたかどうかについての判断を示す記號を附しておいた。九月九日の宴席で作られたと考えられる詩は、二十七首中十七首ある。そのうちの大半が、戲馬臺および樂遊苑で詠まれた公宴詩である。これらの宴はどのようなようにして執り行われたのだろうか。

謝瞻及び謝靈運の「九日従宋公戲馬臺集送孔令詩」は、義熙十四年（晉・安帝四一七）九月九日に宋公（のちの宋の武帝劉裕）が戲馬臺の宴會において、尙書令であつた孔靖の歸郷を送るために賦された詩であり、共に『文選』卷二十に收められる。『宋書』卷五十四「孔季恭傳」にはつぎのようにある。

宋臺初建、令書以爲尙書令、加散騎常侍、又讓不受、乃拜侍中、特進、左光祿大夫。辭事東歸、高祖餞之戲馬臺、百僚咸賦詩以述其美。

宋王朝が樹立されたとき、孔靖は尙書令となり、散騎常侍の位も加えられたが、固辭したため、侍中・特進・左光祿大夫とされた。辭任して、會稽へ歸ることになり、高祖は餞別の宴を戲馬臺で行つた。多くの官僚が詩を作つて孔靖のすばらしさを稱えた。

戲馬臺は、江蘇省銅山縣の南にある項羽が戲馬を行つたとされる高臺である。^①行われた日付が九月九日であり、謝瞻の詩では、「聖心眷嘉節（聖心 嘉節を眷み）」と書かれ、謝靈運の詩では「良辰感聖心（良辰 聖心を感じしめ）」と書かれるように、特別な日であることを臭わせる表現はあるものの、重陽の節句を思わせる描寫はみられず、一般的な晩秋の情景を詠むだけである。

謝瞻の詩では、冒頭八句が情景描寫である。

風至授寒服、
霜降休百工。

風至り寒服を授け、
霜降り百工休む。

繁林收陽彩、

密苑解華叢。

巢幕無留鷺、

遵渚有來鴻。

輕霞冠秋日、

迅商薄清穹。

謝靈運の詩も冒頭四句で情景描寫を行う。

季秋邊朔苦、

旅鴈違霜雪。

淒淒陽舛腓、

皎皎寒潭絜。

戲馬臺の宴會において詠まれた詩として現存するのは、この謝瞻と謝靈運の二首のみであるが、そのときに詠まれた可能性がある斷片の存在が指摘されている。^② そのうち、范泰「九月九日詩」(『北堂書鈔』卷百五十五・歲時部・九月九日所引)は、秋の情景を詠んだ四句のみが残る。

勁風肅林阿、

鳴雁驚時候。

籬菊熙寒藂、

竹枝不改茂。

繁林 陽彩を收め、

密苑 華叢を解く。

幕に巢くひて留まる鷺無く、

渚に遵ひて來たる鴻有り。

輕霞 秋日に冠し、

迅商 清穹に薄(せま)る。

季秋 邊朔苦しく、

旅鴈 霜雪を違(さ)く。

淒淒として陽舛腓(や)み、

皎皎として寒潭絜し。

勁風 林阿に肅たり、

鳴雁 時候に驚く。

籬菊 寒藂(かんそう)に熙(ひか)り、

竹枝 茂を改めず。

ここでは、「籬菊」という、陶淵明「飲酒其五」の「採菊東籬下」を想起させる語が用いられている。しかし、本當に范泰が戲馬臺の宴に参加し、この詩を詠んだのか、また、菊以外の重陽にまつわる要素が詩に詠われていたかどうかなどが不明である。

戲馬臺の宴は九月九日に行われているものの、主眼は孔靖の送別であり、また競作された詩においても、重陽節を強く意識した表現がとりこまれていなかった。陶淵明の詩とはかなり異質なものである。

この戲馬臺における九月九日の宴がその後も行われたという記述が、『南齊書』卷九「禮志上」にある。

史臣曰、……宋武爲宋公、在彭城、九日出項羽戲馬臺。至今相承、以爲舊准。

史臣曰く、……宋の武帝がまだ宋公であつたとき、彭城において、九月九日に項羽の戲馬臺に行樂に出かけた。今にいたるまでその行事が傳えられ、昔のやりかたにのっとつて行われている。

齊以降、戲馬臺の宴會における詩作は残らないが、その他の場所で九月九日に宴會が行われた際に作られた詩が多くある。表一9、10番は、王儉と蕭子良が同時代を生きており、かつ兩者とも四言詩であることから、同じ宴席での作の可能性がある。

また、表一11、12、14、15、16、18、21番は詩題に「樂遊苑」の語がみられる。樂遊苑は、晉の時代には藥草園があり、⁽¹⁾宋の時代には上巳曲水の宴などが行われた場所である。重陽節の時に限らず、多くの宴會が行われた。

表の時代欄は、詩人の没年による分類のため、梁代のみであるが、詩人の生没年等から考察すると、11から14番は齊代に作られた可能性が高く、齊から梁にかけて、樂遊苑等で九月九日の宴が何度か催され、詩作が行われたのだろう。實際、『南齊書』卷三「武帝紀」には、九日臺という場所で九月九日に宴が行われたという記録があり、⁽²⁾『梁書』卷三十五「蕭子顯傳」に引用される蕭子顯「自序略」では、九月九日の宴で詩を賦したと書かれる（ただし、蕭子顯の現存する詩には、九月九日にちなむ作はない）。

天監十六年、始預九日朝宴。稠人廣坐、獨受旨云「今雲物甚美、卿得不斐然賦詩」。詩既成、又降帝旨曰「可謂才子」。

天監十六年（梁・武帝五一七）⁽³⁾に、はじめて九月九日の宴會に参加した。多くの人が宴席に連なり、私だけが皇帝の命令を受け、「今、景色が美しい、あなたはもちろん詩を作るでしょうね」、と言われた。詩ができると、また皇帝のお言葉がくだされ「まことに才子であることよ」、と言われた。

表一の備考欄には、詩中にみられる重陽節を思わせる詩句をあげておいた。樂遊苑の詩では、重陽節を想起させる詩句は、12番丘遲「九日侍宴樂遊苑詩」の「寒花委砌」（寒花は菊を表現する）、21番庾肩吾「九日侍宴樂遊苑應令詩」の「獻壽重陽節」「玉醴吹花菊」くらいしかない。他の詩でも、先の謝朓、謝靈運詩のように情景描寫は行われている。しかし、そこで目立つのは秋の鳥としての雁であり、菊や茱萸といったものではない。

このように、六朝期の九月九日の宴は重陽節にちなみ行われたのであろうが、そのときの詩として、重陽節を想起させる詩句を入れることは必須ではなかった。これは、三月三日に關する詩には必ずといっていいほど、曲水の流れに浮かべる羽觴が詠み込まれるという傾向とはことなる。

表一16番劉苞「九日侍宴樂遊苑正陽堂詩」と、22番庾肩吾「九日侍宴樂遊苑應令詩」にはともに「飲羽」の語がみられる。「飲羽」とは、矢が標

的に矢羽根の部分まで深くいこむことを意味し、矢が當たること、すなわち、射的を行っていたのだと考えられる。また、表一25番、陳後主叔寶の詩題は「五言同管記陸瑜九日觀馬射詩」である。九月九日の宴會では、射的が同じ場所で行われていたのではないだろうか。

實際に、詩以外でも九月九日に射的を行なったという記録が幾つか存在する。たとえば、『南齊書』卷九「禮志上」には、

九月九日馬射。或說云、秋、金之節、講武習射。像漢立秋之禮。

九月九日には流鏑馬を行う。また、秋は五行配當で金の季節にあたり、武術の講習會を行い、射的を習うのだという。ちょうど漢代の立秋の儀禮のようなものである。

とある。¹⁸ 九月九日の宴會は、軍事教練なども絡みつつ、行樂が行われることが続けられ、齊・梁代には、その場で詩を作ることが盛んになったのだらう。

このように、六朝期の宮廷で行われた九月九日の宴は、重陽節にちなみながらも、現在の歲時資料に残る風習を必ずしも行っていないかった、あるいは重視していなかったことが確認できた。

三、六朝期の重陽節

六朝期の九月九日詩は宴詩が大半であり、陶淵明詩は孤立しているようにみえる。しかし、筆者は、重陽節のこととは明記されないものの、鮑照「答休上人菊詩」など、菊や酒等が詠み込まれる詩が存在することを發見した。表二は、そのような詩及び、詩中の表現を一覧にしたものである。これらのすべてが重陽節にちなむ詩ではないかもしれない。また、詩題から、これらは應制詩でないことがわかる。

九月九日重陽節の特徴として、前掲の『荆楚歲時記』及びその注の記述を総合すると、宴會を行うこと以外の特徴として、

● 菊花の酒を飲む

● 高所に登る

● 茱萸の實を身につける

の三点があった。しかし、表二備考欄では、菊と酒の表現は目立つものの、高所に登ること、茱萸の實を身につけることに關連する表現はほとんど見あたらない。この頻度の差は何に由來するのだろうか。もし、これらの詩が重陽節にちなんでいるとした場合、高所に登ることや茱萸の實を

身につけることは、六朝當時、重陽節にちなんで行われることではなかったのだろうか。

後述するように、歳時記として一冊の書籍にまとめられたのは『荆楚歳時記』がはじまりかもしれないが、歳時に關する記録であれば、他の書籍・詩賦などに求めることができる。これら三點の記述について、文獻的に古いものにとどのようなものがあるか、詩に詠み込まれるようになるのはいつからかについて、順番に検討していきたい。²⁰⁾

(1) 菊花及び菊酒

九月九日と菊花との關連はかなり古くからみられる。『禮記』「月令」には「鞠有黃花（鞠に黃花あり）」とあり、後漢・崔寔『四民月令』には「九月九日、可採菊花（九月九日には菊の花を摘むべし）」との文言がある。

そして、魏文帝「與鍾繇書」（『藝文類聚』卷四・歳時中・九月九日等所引）では、菊は長壽をもたらすとの考えが披露されている。

歳往月來、忽復九月九日。九爲陽數、而日月並應、俗嘉其名、以爲宜於長久。故以享宴高會。是月律中無射。言羣木庶草、無有射而生。至於芳菊、紛然獨榮。非夫含乾坤之純和、體芬芳之淑氣、孰能如此。故屈平悲冉冉之將老、思食秋菊之落英。輔體延年、莫斯之貴。謹奉一束、以助彭祖之術。

歳月がゆきすぎて、あつという間にまたもや九月九日となりました。九は奇數であり、また月と日の數が同じなので、俗世間ではその日を尊び、長壽をもたらすと考えています。そのために、宴會を行うのです。この月の音調は十二律中の無射にあたります。つまり、草木は光が足りず生えることができません。ただ芳しい菊だけが、咲き亂れることができます。天地の調和を含み、馥郁とした淑氣をもっているものでなければ、どうしてこのようにことができるのでしょうか。そのために屈原は、だんだんと年老いていくのを悲しみ、秋菊の落ちた花びらを口にしたいと望んだのです。體の榮養を補い、壽命を延ばすのに、菊の花よりもよいものはありません。一束を差し上げて、長壽の仙人であつた彭祖の術の手助けといたく存じます。

それでは、陶淵明のような、菊酒の記録は何に求められるだろうか。『臨海記』（『藝文類聚』卷四・歳時部中・九月九日所引）には、菊酒及び登高の原型とおぼしき記述がある。

郡北四十步、有湖山、山甚平正、可容數百人坐。民俗極重、每九日菊酒之辰、讌會於此山者、常至三四百人。

郡の北方四十歩のところには、湖山があり、山の頂上が平地になつていて、數百人が座ることができる。民衆の風俗ではここを非常に重んじ、九日の菊酒の時期ともなると、この山で宴會をするものが、いつも三、四百人にもなる。

『臨海記』は、『隋志』に著録されない書籍であるが、佚文資料をみるかぎり、臨海郡に関する地理書だったようである。『太平寰宇記』卷九十八が引用する『臨海記』の佚文には、「晉永和三年（穆帝三四七）」とあり、『藝文類聚』卷八が引用する佚文には「隆安（晉・安帝三九七—四〇二）初」とあるため、晉から宋にかけて、陶淵明と同時代、あるいは少し遅れての成立ではないかと考えられる。²¹

(2) 登高

高所に登り、自分の思いを述べる詩の傳統は魏の曹植以來ある。節日に高所に登るとするのは、九月九日登高以外にも、正月人日などにもあり、一定していなかった。²² また、六朝期の九月九日の詩には、登高の題材がみられないとの指摘もある。²³

ただ、筆者の調査のなかで発見したのが、陸雲の失題の四言詩である。題名が失われてしまったために、詩が詠まれたのが九月九日であったかどうかは不明である。しかし、菊の花と高所に登ることが同時に出てくる最古の詩であろう。

思樂芳林、
芳林を樂しむを思ひ、

言采其菊。
言（ここ）に其の菊を采る。

衡薄遵塗、
衡の薄（くさむら）塗（みち）に遵ひ、

中原有菽。
中原に菽（まめ）有り。

登彼修巒、
彼の修巒に登り、

在林寤宿。
林に在りて寤宿す。

彷彿佳人、
彷彿たる佳人、

清顏如玉。
清顏は玉の如し。

この失題詩は全部で六首あり、ここにあげたのはその第一首である。詩の内容全體は、自分の老いと孤獨を嘆いており、陶淵明詩のさきがけともいえよう。

九月九日に高所に登ったという記述は詩に限らなければ、六朝期にも複数ある。先に引用した『臨海記』の記述でも山に登る、と書いてあった。また、『豫章記』（『太平御覽』卷七十四・沙所引）は、「登高」の語を用いて九月九日の風習を紹介している。

龍沙在郡北。帶江沙甚潔白、高峻而峙。陂陁有龍形。舊俗九月九日登高上處也。

龍沙は郡の北にある。長江の沙を帶びて非常に白く、高く險しい。斜面に龍の姿らしきものがみえる。昔の習俗では九月九日の登高の行事

が行われた場所であつた。

『豫章記』は、『隋志』史部地理類に、雷次宗撰とある。雷次宗は『宋書』卷九十三「隱逸傳」に傳があり豫章出身であることが記される。

『孟嘉列傳』（『初學記』卷四等所引）²⁴には、九月九日に山で宴會をしたという記述もある。

〔孟〕嘉爲桓溫參軍、既知其政、溫甚重之。九月九日溫遊龍山、參僚畢集。風吹嘉帽落、不覺如廁。孫盛時在坐、溫授紙筆命嘲之、着嘉坐處。嘉歸見之、笑而讀紙即答。了不容思。

孟嘉が桓溫の參軍となり、その政治能力を知られたため、桓溫は孟嘉を非常に重用した。九月九日に桓溫は龍山に遊び、幕僚たちが皆集まった。風が孟嘉の帽子を吹き飛ばしたのに、孟嘉はそれに氣づかないまま、廁に行ってしまった。孫盛はそのとき宴席の場におり、桓溫は紙を與えて、孟嘉のことをからかわせ、その紙を孟嘉の座席に置かせた。孟嘉は戻ってきてその文をみると、笑つて紙を求めてすぐさま返事を書いた。たちまち出來上がった。

この宴席で書かれた文章は、應制詩でなく、個人的なからかいとその返答である。また、晉・習鑿齒『襄陽記』には、劉弘と山簡が九日に山で宴會をしたとの記述がある。²⁵兩者とも『隋志』に別集があつたことが記録されるが、詩は現存せず、宴會にちなみ詩を作つたかは不明である。

このように、六朝期には、九月九日に山に登つた、遊んだという記述はあるものの、陸雲の詩を除くと、登高の題材は詩に詠み込まれていない。それは、九月九日の詩は宴詩が中心であり、個人の感慨を詠うものでなかつたからだろうか。

（3）茱萸

先に引用した『荆楚歲時記』杜公瞻注では、引用文に引き續き、菊酒、登高、茱萸の起源の説明として、梁・吳均『續齊諧記』を引用する。これは、後漢の費長房が弟子に九月九日に不幸が起きると豫言して、茱萸の實を身につけさせ、高所に登り菊酒を飲んで厄よけをするように勧めた、という話である。また、杜公瞻は言及しないが、『西京雜記』卷三及び晉・干寶『搜神記』卷二には漢代、戚夫人の侍女が九月九日宮中で茱萸の實を身につけ、菊の酒を飲み、長壽を得ようとした、といった話がみられる。しかし、『續齊諧記』は梁代になってからの著作であり、『西京雜記』は成立時期が曖昧で、『搜神記』も類書等には『搜神記』からとして引用されていない、原本には存在しなかつたと考えられる箇所である。費長房の話も、戚夫人の話も起源の説話として、後代になって作られたものであろう。²⁶

茱萸自體の效能については、『齊民要術』にすでに詳細な記述があるが、九月九日と結びつけた古い記録としては、『藝文類聚』卷四・歲時部中・九月九日及び卷八十九・木部下・茱萸に引用される『風土記』の文がある。²⁷

九月九日。律中無射而數九。俗尚此月。折茱萸房以插頭。言辟除惡氣而禦初寒。(卷四)

九月九日。この月の音調は十二律中の無射にあたり、数が九である。俗世間ではこの月を尊ぶ。茱萸の房を折って頭に挿す。これは惡氣を避け、冬のはじめの寒さを防ぐのだという。

茱萸、椒也。九月九日熟。色赤、可採時也。(卷八十九)

茱萸は椒である。九月九日に熟す。赤色になると收穫時期である。

『風土記』は後で詳述するように、吳から晉にかけての人、周處の撰になるものであり、歲時習俗記錄の先駆けと目される記事が多い書籍である。

また重陽と茱萸を結びつけた記述が劉宋・荀伯子『臨川記』(『太平寰宇記』卷百十所引)にもある。

王羲之嘗爲臨川内史、置宅於郡東高坡、名曰新城。傍臨迴溪、特據層阜。其地爽塏、山川如畫。今舊井及墨池猶存。每重陽日、郡守從事多遊於斯。因立亭曰茱萸亭。

王羲之が臨川内史であったとき、自宅を東の高臺に設け、新城と名づけた。傍らには川が流れ、高い丘がよりそっていた。その土地は高所にあつて乾燥しており、山川の眺めは繪畫のようであつた。現在も當時の井戸と筆や硯を洗った池がまだ残っている。重陽の節句の日毎に、郡守や従事の多くがここで宴遊する。そこで、あずまやを建てて茱萸亭と名付けた。

同内容の文が『太平御覽』卷百七十(州郡部・江南道・撫州)にも引用されるが、茱萸亭と名付けたとのくだりはない。著者とされる荀伯子は『宋書』卷六十に傳があり、文集があり、また史書等の編纂に携わっていたことがわかる。しかし、『臨川記』という書物については、『初學記』と『北堂書鈔』にも他の佚文があるものの、『隋志』等にも著録されていない。この資料が信賴のおけるものであれば、王羲之よりあと、劉宋時代に、重陽の節句の宴と茱萸が結びついていたもう一つの例となる。

けれども、表二の備考欄をみてもわかるように、六朝期の九月九日詩で茱萸は一切詠み込まれていない。重陽の語や、九月九日との結びつきがそれほど深くなかつた六朝期に、この文が書かれたというのは少し疑問が残る。

重陽節と茱萸の結びつきが詩で意識されなかつたのは、どうしてなのだろうか。一轉して唐代の重陽節の詩になると、茱萸の語が用いられ、張説の詩「湘州九日城北亭子」では、重陽節のことを茱萸節と表現している。

西楚茱萸節、

西楚の茱萸の節、

南淮戲馬臺。

南淮の戲馬臺。

寧知沅水上、

寧ぞ知らん沅水の上、

復有菊花杯。

復た菊花の杯有るを。

亭帳憑高出、

亭帳 高きに憑りて出で、

親朋自遠來。

親朋 遠く自り來る。

短歌將急景、

短歌するに 將に急景あらんとし、

同使興情催。

同に興情をして催せしむ。

張説はこのほか「九日進茱萸山詩」五首などでも茱萸の語を用いている。

初唐以降、重陽節の詩の作例は急激に増加する。そして、それらには、登高、菊酒といった、六朝期の詩にみられたモチーフのみならず、茱萸もかなりの頻度で登場する。歳時記録と詩における歳時儀禮・行事の受容のずれの背景には何があるのだろうか。

四、歳時記の編纂の意圖とその役割

これまでみてきたように、歳時儀禮・行事に関する記録は、歳時記のみならず、様々な書物に記されている。それらの情報を統合して歳時記という一冊の書物を編もうという機運はどのようにして生まれたのだろうか。また、その歳時記はどのように受容されたのだろうか。歳時記編纂の歴史をひもときつつ、考えてみたい。

(1) 地理書からの分離

守屋美都雄『中國古歳時記の研究』²⁸⁾では、『荆楚歳時記』以前の歳時記的な書物として、茱萸の解説を載せていた晉・周處『風土記』をとりあげる。『風土記』は、『隋志』で史部地理類に著録されており、また唐・劉知幾『史通』「書志篇」においても、地理書のさきがけとされているが、地理書の體裁の中に歳時儀禮の記事を多數掲載していたようで、関連する佚文が多く残る。守屋氏は、周處はもと吳の人で、華北の人々が南方に多く流入したことにより、自分たちの文化を廣く示そうとして、地理記録のなかに歳時儀禮の記録も交えたのではないかとしている。

そして、梁代になり、宗慄が『荆楚歳時記』を編んだ。荆楚とは現在の長江中流域のことである。侯景の亂が起こり、武帝は死去、湘東王―後

の元帝——は荊州の王であり、宗懷等荊州の人間を重用した。侯景の亂で建業（南京）を離れたあと、宗懷は建業に戻るのではなく、楚の別宮であつた渚宮へ遷都してはと提案した。このような宗懷の郷土愛が『荊楚歲時記』を編ませたのではないかとされる。³⁰⁾

守屋氏の『中國古歲時記の研究』、及び『荊楚歲時記』解説では、『荊楚歲時記』を引用する最古の書籍である『玉燭寶典』が書名を『荊楚記』としていることから、本来の書名は『荊楚記』であり、杜公瞻の注釋が附されるに際して、宗懷の序文にある「歲時」の語を用いて『荊楚歲時記』となつたのではないかと推測している。³¹⁾つまり、『荊楚歲時記』も本来は地理書であつた可能性がある。ただ、現行の『荊楚歲時記』に純粹な地理の記録はみられず、また、歲時への強い關心が序文において示される（北宋・晁公武『郡齋讀書志』所引）。

傅玄朝會、杜篤上巳、安仁秋興、君道娛蟻、其屬辭已洽、其比事則不弘。某率爲小記、以錄荊楚歲時。元日至除夕、凡二十餘事也。

傅玄の元日「朝會の賦」、杜篤の上巳「祓禊の賦」、潘岳の「秋興の賦」、嵇含の「娛蟻の賦」は、人口に膾炙しているが、行事自體が普及しているとは言い難い。そのために、私はささやかな本を書いて、荊楚地方の歲時儀禮について記録しようと思う。元日から大晦日まで、全部で二十項目あまりをたてた。

この序文は北宋代までしか遡れず、本當に宗懷の序文なのかは、疑問も残るが、歲時の記録の不備を補おうとして、一書にまとめたとの内容は、現在の『荊楚歲時記』の實態と一致する。

交通や情報傳達手段が發達していなかつた六朝當時、地域毎に歲時儀禮・行事も多種多様であつたことだろう。地理書は當該地域の風習を記すことで、地理書としての役割だけでなく、その地域の歲時記の役割も擔つていたのである。そこから、歲時記が獨立していったのだと考えられる。

（2）歲時習俗における雅俗の問題

歲時に關する記述は、『荊楚歲時記』出現以前にも、断片的な記述であれば様々な書にみられる。

たとえば後漢・應劭の『風俗通義』には、端午節の不祥よけに關する記録があり、また志怪にも劉宋・劉敬叔『異苑』に載る一月十五日の紫姑傳說や、『續齊諧記』に載る五月五日の屈原傳說など、歲時儀禮の由來を説くものが載せられている。それらが『玉燭寶典』の本文や『荊楚歲時記』注にも引用される。

また、これまでみてきたように歲時儀禮・行事の説明には「俗」との表現がよくある。これは、いわゆる「雅」の反意語としての「俗」と考えるべきだろう。つまり、歲時記的な記録においては、歴史書の禮志には記録されないような、宮中行事ではない歲時習俗を積極的に記すという意

圖が反映された表現なのではないだろうか。

實際、『風俗通義』は正しい風俗と何かにについて記した書であり、民間のことも多く載せる。志怪も文人貴族の逸話ばかりの『世說新語』とはちがい、無名の人物の故事でも載せる。そのことから考えると、先に紹介した『風土記』の茱萸の説明にあった「俗尚此月」の「俗」も、いわゆる文人貴族ではない人々の生活に根ざした歳時儀禮・行事として記したのではないかと考えられる。

文人の季節行事は、もともと民間にあった風習をとり入れ、それを「變化」させたものである。たとえば、三月三日の曲水は、本來は御祓という宗教儀禮の意味を持っていたものが、王羲之の曲水の宴の行事をきっかけに、御祓の儀禮ではなく、詩作をするための宴會へと性質を變えた。文人は、民間にあった儀禮・行事の意味を骨抜きにし、本來の意圖を忘れてしまう。それは、『續齊諧記』に載せられる、晉の武帝が臣下達に曲水の宴の由來を尋ねるエピソードからも伺われる。民間の歳時行事が宮中儀禮となるとき、それは儀禮本來の意義を失い、行樂のための口實となる。その元祖が曲水の宴なのである。

重陽の行事の記録はいちおう六朝時代から確認できた。しかし、それらは六朝當時はまだ「俗」なものであり、貴族文化として取りいれられていなかった。このように推定すれば、九月九日の應制詩には、重陽節を思わせる表現がないことが説明できる。そして、陶淵明の詩は應制詩ではなく、個人的な感慨を詠ったものである。そのため、俗な風習である菊酒がとりあげられた。つまり、六朝期の九月九日詩において、陶淵明の作例が特殊なのは、陶淵明という詩人の立場によるものである。

ちなみに、『文選』の李善注では、『荆楚歲時記』（また本來の書名と考えられる『荆楚記』も）は一度も用いられていない。『風土記』も、地理情報に関する記載のみが用いられている。それでは、歳時儀禮・行事に関する注に何を用いているかといえば、三月三日の御祓に關しては、『續漢書』『禮儀志』や『周禮』が引用される。もちろん、李善が『荆楚歲時記』を参照できなかったという可能性も考えられる。しかし、『文選』に収録されるような作品に詠われる歳時儀禮・行事に關する注釋を附すためには、古い經典の記述で充分まかなえてしまった、いいかえれば、貴族文化の源流は基本的に經書に求め、『荆楚歲時記』のような俗文化を記録する書籍は必要がなかったとも考えることができないだろうか。

(3) 隋の統一から唐以降における歳時記編纂とその受容

梁の宴詩においては、重陽節を伺わせる表現は少數ながら存在した。しかし、詩はあくまでも宴の中のみに限定されている。いっぽう隋や初唐の歳時詩では、宴の詩でもそうでなくても、表現の傾向にちがいがあある。これは、何を意味しているのだろうか。

隋・杜臺卿『玉燭寶典』十二卷は、『荆楚歲時記』のつぎに古い歳時記であり、卷九を缺く寫本が前田尊經閣のみに傳わる。³²⁾ 撰者は隋の杜臺卿で

ある。また、『荆楚歲時記』の注釋者杜公瞻は杜臺卿の姪子にあたり、『玉燭寶典』を参考に『荆楚歲時記』に注したとされるが、そのなかで、南北の文化の異同を逐一指摘している。

『荆楚歲時記』重陽の行事について、杜公瞻の注は「今北人亦重此節」としていた。重陽の節句の行事が過去ではなく、「現在」、北方の人々のあいだで「も」重要視されていると強調している。

北方人は、南方の文化を學ぼうとしたとき、『玉燭寶典』のような歲時記を編み、また『荆楚（歲時）記』に詳細な注を施した。これらは網羅することが重要視された。そして、南方における雅俗の區別をすることなく、歲時儀禮・行事を取り入れようとしたのではないだろうか。

先に引用した張説の九月九日詩は、『西楚茱萸節、南淮戲馬臺』と地域まで意識した對句表現になっていた。これこそ、書籍から得た知識による造句といえるのではないだろうか。

唐初に編まれた類書にも、歲時の項目は必ずたてられている。類書は、唐初の詩文作成にとって必要不可欠なものであった。⁽³³⁾ 頻繁に行われた歲時儀禮・行事のなかで、歲時のみの情報を取り上げた歲時記は、てっとり早い歲時儀禮・行事の指南書だったのではないだろうか。そして、詩を詠むときも、歲時記や類書を参考に習俗を詠み込み、歲時儀禮・行事の雰囲気表現しようとした。このようにして、唐代以降の歲時詩は盛行し、また唐代以降、多くの歲時記が編まれたのだと考えられる。

むすびにかえて―陶淵明の受容

ここで再び九月九日重陽節の歲時詩に戻る。長谷川氏がすでに指摘しているように、重陽の節句を詠う詩は陶淵明以後ほぼ斷絶し、隋唐になって復活する。そして、それらの詩のなかには、陶淵明を意識したものが多数ある。⁽³⁴⁾ たとえば、王勃「九月九日採石館宴序」は、先に紹介した『續晉陽秋』の王弘が重陽節の日に陶淵明に酒を贈った故事を下敷きとした表現がみられる。

九日重陽節、
九日の重陽節、

開門有菊花。
門を開けば菊花有り。

不知來送酒、
知らず 來たりて酒を送るを、

若箇是陶家。
箇（かく）の若きは是れ陶家ならん。

陶淵明は死後暫く評價されなかった。⁽³⁵⁾そして、唐代以降に詩人としての評價が高まる。唐代以降の重陽節の詩の盛行に關しては、歲時記を用いた詩作という問題のみならず、陶淵明の受容の問題を改めて考える必要があるだろう。今回は、時間と紙幅の制限があり、そこまで踏み込めなかった。今後の課題としたい。

注

(1) 儀禮・行事と書くのは、節日毎に行われる行為が本來は宗教儀禮や御祓といった儀禮としての意味を持っていたとしても、後世、とりわけ貴族・文人の文化として取り入れられる段階となると、儀禮の宗教性・儀式性が失われ、單なる行樂のための行事の意味合いが強くなるためである。しかし、どこまでが儀禮でどこからが行事であるかの線引きをすることは困難である。そのため、儀禮・行事と併記する。

(2) 四庫全書に收められる。なお、今回『先秦漢魏晉南北朝詩』と『歲時雜詠』の兩方を検討していたところ、『先秦漢魏晉南北朝詩』が校訂に使っている明代抄本で北京圖書館藏という『歲時雜詠』と、日本で簡便にみられる四庫版とは、テキストに違いが多いことに氣付いた。

(3) 参考に『歲時雜詠』中の各歲時詩の最古例の作者名・作品名をあげてみる。

元 日：魏・曹植「元會」

立 春：梁・劉孝威「鬪綵花絕句」

人 日：北周・庾信「和人日晚景宴昆明池」

上 元：陳後主「宴光璧殿詠遙山燈」

晦 日：北魏・盧元明「晦日泛舟應詔」

中和節：中唐・德宗「中和節日宴百寮」

寒 食：初唐・杜淹「詠寒食關鷄秦王教」

清 明：初唐・李嶠「清明早赴王門率成」

上 巳：晉・張華「上巳篇」

春盡日：中唐・雍裕之「三月晦日郊外送客」

端 午：梁・王筠「五日望採拾」

夏 至：中唐・韋應物「夏至避暑北池」

立 秋：盛唐・孫逖「立秋日題安昌寺北山亭」

七 夕：漢・閼名「七夕」(即古詩十九首其十)

中 元：中唐・德宗「七月十五日題章敬寺」

中 秋：盛唐・杜甫「中秋夜月」

重陽：晉・陶潛「九日作」（即「九日閑居」）

初冬：盛唐・杜甫「十月一日初冬」

冬至：晉・張華「冬至日小會」

除夜：梁・庾肩吾「歲盡應制」

(4) この問題について、筆者はすでに「中國の祭日と死者を巡る物語り」（小関隆編『記念日の創造』人文書院、二〇〇七）で簡単に検討しているが、そこでは、單に、『文選』、『玉臺新詠』の編纂と結びつけて、當時の總括的な書籍を編む風潮を指摘しただけで、歲時詩については全く觸れなかった。

(5) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局、一九八三）。

(6) 三月の御祓の行事は、古くは月はじめの巳の日（上巳）に行われたが、六朝期には三月三日にはほぼ固定されている。そのため、本論では、三月上巳と三月三日は同質のものとして扱う。

(7) 『初學記』は「四民」を「土民」につくる。この場合の意味は「その土地の人」となる。

(8) 『藝文類聚』卷八十一・藥香草部上・菊にも簡略化された文がみえる。

(9) 長谷川滋成『陶淵明の精神生活』「九日（きくざけ）」（汲古書院・汲古選書、一九九五）参照。

(10) 戲馬臺での宴とそこに集まった詩人・詩作については佐藤正光「謝瞻・謝靈運の文學とその周邊——彭城戲馬臺の宴遊と作品の考察——」（『南朝の門閥貴族と文學』汲古書院、一九九七、第四章）に詳しい。

(11) ただし、戲馬臺に関する資料は、文獻的には、劉宋以降のものにしかみられず、實際に項羽の時代から存在したかは不審。

(12) 佐藤氏前掲書参照。

(13) 佐藤氏前掲書は戲馬臺の宴會の参加者として、『宋書』の記載により、宋の官僚として赴任した人物から、文章で有名だった人物として、謝靈運、謝瞻、謝晦、傅亮、范泰、蔡廓、劉湛、范曄をあげる。しかし、直接戲馬臺に参加したという文獻資料があるわけではない。

(14) 『文選』卷二十范曄「樂遊應詔詩」李善注「丹陽郡圖經」曰、樂遊苑、宮城北三里。晉時藥園也（『丹陽郡圖經』にいう、樂遊苑は、都の北三里のところにあり。晉の時代の藥草園である）。

(15) 『文選』卷二十顏延之「應詔誦曲水作詩」李善注「水經注」曰、舊樂遊苑、宋元嘉十一年、以其地爲曲水。武帝引流轉酌賦詩。裴子野『宋略』曰、文帝元嘉十一年三月丙申、禊飲于樂遊苑、且祖道江夏王義恭、衡陽王義季、有詔、會者賦詩。（北魏・酈道元『水經注』にいう、舊樂遊苑は、宋の元嘉十一年（四三三）に、武帝の元嘉十一年三月丙申の日に、祓禊の儀禮を樂遊苑で行い、江夏王劉義恭、衡陽王劉義季の送別を行い、詔があつて、參會者は詩を詠んだという）。

(16) 『南齊書』卷三「武帝紀」（永明五年）九月己丑、詔曰「九日出商飢館登高宴群臣」。辛卯、車駕幸商飢館。館、上所立、在孫陵岡。世呼爲「九日臺」者也（永明五年（四八七）九月己丑の日、「九日に商飢館に出向き、高所に登って臣下達を宴でねぎらう」との詔があつた。辛卯の日、車に乗って商飢館に御幸した。商飢館は皇帝が建てられたもので、孫陵岡にある。世の人々が「九日臺」と呼ぶものである）。

(17) 『南史』卷四十二は、同所について天監六年（五〇七）のこととする。

(18) 同文が『晉書』卷二十一「禮志下」にもみられる。

(19) 李炳海「上巳、重陽習俗演變の文學軌跡」（『河南大學報（社會科學版）』三八—二、一九九八）は、北朝では十六國時代以降、三月上巳の日に狩獵が行われた

こと、そして、重陽節も、北周において、狩獵の習慣が追加された、と指摘する。また、本文で引用した『南齊書』『禮志』の狩獵活動の記述については、根據が不明瞭だが、北朝の遊牧文化の影響であろうとする。

- (20) 重陽節の各儀禮・行事については守屋美都雄『荆楚歲時記』(平凡社・東洋文庫、一九七八)や、王毓榮『荆楚歲時記校注』(文津出版社、一九八八)に詳しい考證があり参考にした。

- (21) 守屋氏前掲『荆楚歲時記』二一〇頁は、『臨海志』について、吳・沈瑩の『臨海水土物志』だとする。ただ、『臨海水土物志』の『太平御覽』にみえる佚文は、海の生物の記述に限られ、また、『臨海記』からとされる『藝文類聚』、『太平御覽』の佚文は、地理の記述のみである。このこと及び、本文中にあげた年號の記述から、『臨海記』と『臨海水土物志』は別書だと考える。

- (22) 中村喬『中國の年中行事』(平凡社、一九八八)一九九頁は登高の風習は祓禊の性質を持ち、正月七日、正月十五日などとも結びついていたが、のちに九月九日に集約されたと指摘している。また、宇野直人『中國詩歌における登高遠望の系譜』(『中國詩文論叢』二、一九八三)は、詩に詠まれる登高の習俗は歲時習俗と結びついたものというよりも、本來呪術的な意味を有していたとする。

- (23) 松田稔『唐の登高詩起源考』(『漢文學會報』二一、一九七五)は、六朝の重陽の詩と登高の詩が唐代になって結びつき重陽登高の詩が生まれたとする。

- (24) 『世說新語』識鑒篇劉孝標注、『北堂書鈔』卷百五十五は出所を『孟嘉別傳』とする。『晉書』卷九十八『孟嘉傳』及び『陶淵明集』『晉故征西大將軍長史孟府君傳』も細かい文字の異同はあるものの、ほぼ同内容が含まれる。ちなみに孟嘉は陶淵明の母方の祖父にあたる。

- (25) 晉・習鑿齒『襄陽記』(『太平御覽』卷三十二・時序部・九月九日等所引)『望楚山有三名。一名馬鞍山、一名災山。……卽劉弘・山簡九日宴賞之所也(望楚山には三つの名前がある。一つは馬鞍山であり、もう一つは災山である。……劉弘と山簡が九月九日に宴會をしたところである)』。

- (26) 祭日の起源説話については、前掲佐野『中國の祭日と死者を巡る物語り』で五月五日の屈原、三月三日の三人の娘、一月十五日の紫姑等について検討を行った。

- (27) この他、『北堂書鈔』卷百五十五、『太平御覽』卷三十二、九百九十一、九百六十、明・戴義『養餘月令』卷十六にも同種の佚文がみられる。守屋美都雄『中國古歲時記の研究』(帝國書院、一九六四)資料編『周處『風土記』輯本』三〇九—三二〇頁参照。ただし、『藝文類聚』の文は收められていない。

- (28) 守屋美都雄『中國古歲時記の研究』(帝國書院、一九六四)。

- (29) 『史通』内篇卷三『書志篇』「自沈瑩著『臨海水土』、周處撰『陽羨風土』、厥類衆夥、諒非一族。是以『地理』爲書、陸澄集而難盡。『水經』加注、酈元編而不窮。蓋方物之事、盡在是矣(沈瑩が『臨海水土物志』を著し、周處が『陽羨風土記』を書いてから、その種の書はおびただしく多く、一種類ではない。そこで陸澄が『地理書』という書物として、これらの書を収集したが、すべては集めきれなかった。酈道元が『水經』に注を加えるのに用いたが極めきれなかった。地域の情報、これらの書物に全て盛り込まれているのだ)」。

- (30) 守屋氏前掲『中國古歲時記の研究』、五六頁参照。

- (31) 守屋氏前掲『中國古歲時記の研究』、六一頁及び『荆楚歲時記』二七四頁参照。

- (32) 各月に一巻があてられており、九月の行事が載っている筈の卷九が失われているため、『玉燭寶典』の重陽節の記事がどのようなものであったかはわからない。
- (33) 初唐詩の作成と類書の編纂に係るのではないかと指摘は、聞一多『類書與詩』(『聞一多全集』第三卷、生活・讀書・新知三聯書店、一九八二、初出は『大公報文藝副刊』第五十二期)にある。

- (34) 長谷川氏前掲書は、唐代の陶淵明の影響を受けた九月九日詩として、崔國輔『九日』、杜甫『九日藍田崔氏莊』等をあげる。

(35) 陶淵明は梁・鍾嶸『詩品』では「中品」に分類される。また、釜谷武志「六朝における陶淵明評價をめぐって」(『未名』七、一九八八)は、當時陶淵明が評價されなかった原因を、當時重視された對句表現に長じてないからだと分析している。

☆附表一：唐以前 九月九日の詩一覽表

	時代	作 者	題 名	宴か	頁	備 考
1	晉	陶淵明	九日閒居		990	
2	晉	陶淵明	己酉歲九月九日詩		995	
3	晉		月節折楊柳歌十三首九月歌		1068	「甘菊吐黃花、非無杯觴用」
4	晉	楊 羲	九月九日紫微夫人喻作許示都		1104	道教儀禮を詠い、重陽節とは関係なし
5	宋	謝 瞻	九日從宋公戲馬臺集送孔令詩	◎	1131	
6	宋	范 泰	九月九日詩	△	1144	「籬菊熙寒葉、竹枝不改茂」
7	宋	謝靈運	九日從宋公戲馬臺集送孔令詩	◎	1157	
8	宋	顏 測	九日坐北湖聯句詩		1242	「澄酒汎初蘭」
9	齊	王 儉	侍太子九日宴玄圃詩	◎	1378	四言詩
10	齊	竟陵王蕭子良	九日侍宴詩	◎	1382	四言詩 「輕觴時薦、落英可漚」
11	梁	任 昉	九日侍宴樂遊苑詩	◎	1596	
12	梁	丘 遲	九日侍宴樂遊苑詩	◎	1602	四言詩「寒花委砌」
13	梁	沈 約	爲臨川王九日侍太子宴詩	◎	1630	四言詩
14	梁	沈 約	九日侍宴樂遊苑詩	◎	1630	四言詩
15	梁	劉 苞	九日侍宴樂遊苑正陽堂詩	◎	1671	「立乘爭飲羽」
16	梁	何 遜	九日侍宴樂遊苑詩爲西封侯作	◎	1680	
17	梁	劉孝威	九日酌菊酒詩		1882	「餘杯度不取」
18	梁	簡文帝蕭綱	九日侍皇太子樂遊苑詩	◎	1929	四言詩
19	梁	簡文帝蕭綱	大同八年秋九日詩	◎	1948	
20	梁	簡文帝蕭綱	九日賦韻詩		1958	
21	梁	庾肩吾	九日侍宴樂遊苑應令詩	◎	1985	「獻壽重陽節」「玉醴吹花菊」 「飲羽山西射」
22	梁	王 筠	摘園菊贈謝僕射舉詩		2019	「重九惟嘉節」「泛酌宜長久」
23	梁	王脩己	九日詩	◎	2120	
24	北周	王 褒	九日從駕詩	◎	2336	
25	陳	陳後主叔寶	五言同管記陸瑜九日觀馬射詩	◎	2518	
26	陳	江 總	衡州九日詩		2592	「園菊抱黃華、庭榴剖珠實」
27	陳	江 總	於長安歸還揚州九月九日行 薇山亭賦韻詩		2595	「故鄉籬下菊、今日幾花開」

☆附表二：唐以前 重陽節を思わせる題材が詠み込まれている詩一覽

	時代	作 者	題 名	頁	備 考
1	晉	陸 雲	失題六章其一	715	「言采其菊」「登彼脩櫓」
2	晉	陶淵明	飲酒二十首其七	998	「秋菊有佳色」 「一觴雖獨進、杯盡壺自傾」
3	宋	鮑 照	答休上人菊詩	1287	「酒出野田稻、菊生高岡草」
4	宋		讀曲歌八十九首其五十	1343	「摘菊持飲酒、浮華著口邊」
5	梁	庾肩吾	贈周處士詩	1994	「籬下黃花菊」
6	北周	庾 信	同會河陽公新進山池聊得寓目詩	2375	「菊寒花正合、杯香酒絕濃」
7	北周	庾 信	臥疾窮秋詩	2377	「有菊翻無酒」
8	北周	庾 信	蒙賜酒詩	2378	「仙人一遇飲、分得兩三杯」 「正值菊花開」
9	北周	庾 信	西門豹廟詩	2382	「菊花隨酒馥」
10	北周	庾 信	聘齊秋晚館中飲酒詩	2385	「餘菊尚浮杯」
11	北周	庾 信	衛王贈桑落酒奉答詩	2392	「停盃待菊花」
12	北周	庾 信	就蒲州使君乞酒詩	2392	「灞岸菊花秋、願持河朔飲」
13	隋	元行恭	秋遊昆明池詩	2654	「樽酒慰登臨」「岸菊聚新金」
14	隋	薛道衡	秋日遊昆明池詩	2683	「酒遇菊花開」

※題名及び頁は逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局、一九八三）による